
優しい神隠し

成無己

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

優しい神隠し

【Zコード】

Z0678D

【作者名】

成無巳

【あらすじ】

四年前にキスケは神隠しに遭った。本人には自覚がないが、そういうことになった。四年経つた今、再び神隠しが起きた。

昨日降った雨のせいなのか、やたらと靄の濃い朝だつた。前はほとんど見えない。

子供が一人、山の奥へと進んで行く。道を阻むように茂る草木は朝露に濡れ、一人の着物はすでにびしょ濡れだつた。

「もうちょっと」

一人が言つた。振り返らずに、少し俯き加減で。

「大丈夫」

一人の子供が言つた。もう一人も黙つて同意する。

二人はどんどん山の奥へと入つて行く。

まだ鳥も鳴かない早朝。ざわめきは聞こえず、山は静かだつた。

・

緑茂る季節。

冬を吹き飛ばすように山が色づく。まるで山自体が大きくなつているようだつた。地面の色はもう見えない。

山の奥から楽しそうな声が聞こえる。

見た目より日差しは弱く、寒さが残つていても子供達は元気だ。時折吐く息は時にまだ淡く白いが、それもすぐに次に吐く息に吹き飛ばされる。

そこは山の奥。

そこだけ何か意味があるかのように場所が開けていて、木々が周りを柵のようにつくつ。

中央に大きな大きな岩があつた。

半分は地面に埋まっているが、一番上には大人が手を伸ばしても届かない。道端に落ちている石のよう丸いとも四角いとも言えな

い形。

三人の子供がその岩の周りを走り回っている。

キスケはその中の一人。

いつもは村の子供達と遊んでいるが、今日は違った。今日会ったばかりの、自分より少し幼い子供一人と遊んでいた。

二人は神社の神主様が着るような白い袴姿。そしてまったく同じ顔をしている。双子で、実は女の子と男の子だと教えられたが未だに見分けられなかつた。

岩の上に女性が座つている。

後ろで細く束ねられた黒髪は腰まで届き、双子と同じ袴姿。双子の母親だつた。

整つた顔つきは双子とよくにていたけれど、とにかく美人だつた。最初に見たとき、キスケはどこかのお姫様だと思った。キスケ自身本物のお姫様を見たことはないが、そう思えるほど美人だつた。

岩の上に座り、走り回る子供達を微笑んで見ていた。

その日いつものようにそこへ行つても、いつも遊んでいる村の友達は誰もいなかつた。

かわりにその三人がいた。

母親の仲立ちで、キスケは双子と遊ぶことになつた。最初は会話すらぎこちなかつたが、次第に打ち解けて思い切り遊ぶようになつた。

双子はキスケや村の子供達が毎日のようにする遊びをあまり知らなかつた。それでも教えればどの遊びもすぐにうまくなつた。そして、双子もキスケの知らない遊びをたくさん知つていた。

時間がどれだけ経つたのかは覚えていないけれど、双子の母親が音もなく地面に降りた。

そして、そろそろ帰ると言つた。

緑の間から見える太陽はまだ高く、子供達は不満だつた。本当は

三人ともかなり疲れていたのだが、帰ると言わると反発した。

「あなたのお母さんも心配するから」

そう言われて、キスケも渋々納得して帰ることにした。

また遊ぼうよ。そう言ったキスケに双子は笑顔で共に答えた。
「いつでもここにいるよ」

と。

帰り道。

見慣れた一本の山道。焦ることもなく、ゆっくりと坂道を下る。変ったところなどあるはずもなく、キスケ楽しく遊んだ余韻を引きずりながらのんびり帰った。

村は大騒ぎになった。

小さな村のため、すぐに全ての大人が集まつた。子供達は怖がって遠巻きに見たり、家に隠れたりした。

でも、一番怖かったのはキスケだった。

山から下りて一番最初に会つた老夫婦。顔見知りのため挨拶をしたら、おじいさんは悲鳴を上げて逃げて行き、おばあさんはその場に倒れた。

そして、次から次へと人が集まつてきて今の状態になつた。

わけもわからず、なにを聞いたらいのかもわからなかつた。

いきなり、誰かに体当たりをされた。まったくの不意打ちでキスケは思わず尻餅をついた。

尚圧し掛かつてくる相手を跳ね除けようとしたが、その手が止まる。

母親が自分の胸で嗚咽していた。

何かを言わなければいけないと思い口を開いたが、力一杯抱きしめられていて声が出なかつた。

あきらめて、頭を地面につける。

太陽はいつもとかわらずに輝いていた。

「……一年も、……どこに、行つてたのよ……、……」

母親の小さな言葉は、涙声すぎてキスケには聞き取れなかつた。

キスケは神隠しに遭つた

そう結論付けられた。

そうとしか説明できなかつた。

明けても暮れても戦は続く。

誰もが平和を求め、平和の為に戦う矛盾の時代。

そんな時代の色を感じさせない山奥の一本道。その先にキスケの村はあつた。

キスケが神隠しに遭つて四年が過ぎていた。

神隠しの後、大変だつたのは一週間ほどだつた。それからは以前と同じよう、普通に時間は過ぎていった。

今では話題に上ることすらない。キスケ自身ですら、もしかしたら夢だつたのかも知れないと思うようになつていた。

四年と言う時間は、それほどまでに長かつた。

ただ、キスケが神隠しに遭つたとされている場所は立ち入り禁止になつた。村から山の奥へと続く一本道。その先にある大きな岩のある場所。

立ち入り禁止になつた後も、キスケは何度かそこ行つてみた。が結局だれにも会えず、何も起こらなかつた。

最後に行つた時、大人に見つかってひどく怒られた。

何も言わない母親に抱きしめられたとき、もうそこには行かないとキスケは決めた。

村は人口百人に満たない小さな村。

そのほとんどが女、子供、年寄りで、年頃の男達は皆戦にかり出されてしまった。キスケの父親も百姓でありながら戦で死んだ。働き手がないにも関わらず、領主が取り立てる年貢は重く、一向に軽くならない。

村の生活は苦しくなるばかり。

故に、村では子供も大事な働き手だった。キスケも小さい頃から畑に出た。

どんなに辛くても、村人は村を出ることはしなかった。出たところでどうしようもなかつた。

悪いことは重なるものらしい。まるで磁石のよう。

村で再び神隠しが起こつた。

今度はキスケ以外の子供が全員。

.

山道は草に覆われ、すでに道ではなくなつていた。

その先にあるのは大きな大きな岩。昔は村人達に神の依り代として大事に扱われてきたが、今では所々にコケが生え、上の方は鳥の糞らしきもので汚れている。

岩の上に、この辺りの山々を治める神がいた。

人間の女性の姿で、一人寝転んでいる。

白い袴姿に後ろで細く束ねられた黒髪。妙齢の整つた顔つき。仰向けに寝転んで、上を見る。

岩の周りに木々はないが、少し離れて生えている樹が枝を伸ばして女性の視界を邪魔する。

岩の周りに木々はないが、少し離れて生えている樹が枝を伸ばして女性の視界を邪魔する。

濃い緑と青い空。

緑の隙間から伸びる日の光を体に当てながら、女性が大きく息を吐いた。

「困った……」

神様らしくないため息と言葉。

ことの始まりは四年前だった。

自分の子供達が退屈だと言つて黙々をこね、どうでも言つことを見かなかつた。

たまたまそこに、人間の子供が遊びに来た。

少しだけと思いこの子供と遊ぶことにしたのだが、自分達と人間達では時間の流れが違うことをすっかり忘れていた。

そのせいで人間の子供が村に戻ったときには、一年もの時間が過ぎた後だった。もちろん大変な騒ぎになつてしまつた。

それ以来村人は怖がつてここに来なくなつてしまつた。

彼女自身も上の神にたつぱりと怒られた。

失われた信仰を取り戻すことはとても難しく、信仰がなければ彼女も山を治めるることは難しくなる。

そのせいでここ何年か山の実りは少なく、動物や、村人の生活は苦しくなるばかり。そうなれば信仰はさらに失われる。

「はあ……」

いくら考へても出でるのはため息ばかり。

それも自分のせいだと考えては、心を痛めてばかりの山の神。

加えて、最近の神隠し騒動。

これは、山ノ神とはまったく関係ないことだつた。

この山ノ神が関わつたのは四年前だけ。

ただ、今回のことも四年前のことがなければ起きなかつたであろうこと。そう考えれば無関係とも言えず、例え神の名を勝手に使わされたことでも咎めることはできなかつた。

緩やかに突然、どこからともなく風が吹き、木々の葉を揺らした。一緒に、落ちてくる木漏れ日も揺れる。

風に押されるようにして、彼女は上半身を起こした。

この場所に誰かが近づいて来る。そして、それが誰なのかはすぐにつかつた。

四年前の懐かしい気配は、少しだけ大人になつてゐるよつに感じた。

「本当に……、困ったもんじゃ……」

彼がここに向かつていることを含む、今まで起こつた全てのことにつめ息をつく。

その全ての始まりが自分にあることを、改めて感じつつ、山の神は自分の周りの結界を解いた。

「久しいの」

キスケがその場所に着いたとき、すでに女性はそこにいた。まるで、最初からキスケが来るのを知つていたかのように、岩の前に立つていた。

四年と言つ時間に震んでしまつた記憶。

キスケの中で、その震が少しだけ晴れた気がした。

「四年ぶり……、かの? すっかり大きくなつて」

キスケは頭を下げ、お久しぶりです、そう挨拶をする。会えないかもしれないと思っていた人に会えたわけだが、その先のことを考えていなかつた。

キスケは何をどう聞いたらいいか分からず口ごもる。すると、女性がそつと右手を前に出した。

「よい。言わすともわかつておる。……正直、どうしたものかと思つておつたがの、お主には全てを話しておこひ。それが、ここまで来たお主の願いでもあらうし」

自分は卑怯なのがもしかないと、山の神は思つた。

この辺りの山を治める神という存在でありながら、一人の人間の子供を動かそうとしている。

全てを話し、その後この子供がどうするのか。そして、それを結果として受け入れようとしている。

よい結果ならば万々歳。悪ければ自分が力を使い、なんとかする。大した神様だと、心で笑う。

神の名を語る神隠し。

それが、許せることなのか許すまじきことなのか、神である自分には判断ができなかつた。

もちろん、自分が一つの原因であると考えればのこと。
責任は自分が取ろう。

山ノ神は最後に小さな言い訳をして、話を始めた。

木々によつて閉ざされたよつた空間、湿つた空気が気持ち悪いほどに重く感じられる。

膝まで届く雑草と蔓に邪魔され、歩くだけでもかなり疲れた。

キスケは道などあるはずもない、山の奥を進んでいた。歩いているだけなのに息が切れる。道は険しかつた。

しばらく進むと、先ほどより進みやすくなつたことにキスケは気がついた。それはまるで獸道のようだつた。

位置的には、ちょうど山を挟んで、村の反対側辺りだらうか。

そして、全て山ノ神の言つたとおりだつた。

そこから少し進んだところに、木々の間に小さな家が一軒建つていた。

「四年前のことはすまんかった、あれは軽率じやつた。お主にはもちろん、村人にも迷惑をかけた。」

そう切り出した山ノ神。すぐに言葉を繋いだ。

「だからこそ、とは言えんかもしかんが、今わしの知つている限りのことを話そ。……今起こつてゐる神隠し、あれはわしとはまったく関係ない。」

が、他の人間がさらつたわけでもない。」

小さな一軒家。

そこから一人の男の子が出てきた。見覚えのある顔は紛れもなく、キスケの村の男の子だった。

「あれは子供達の自作自演じや」

山ノ神は、真っ直ぐにキスケを見つめた。

キスケも視線を外さなかつた。

が、キスケが山ノ神を見ていたかどうかはわからない。キスケは何も言えなかつた。探していたものが、まったく的外れな場所から現れた。答えはただそこに浮いていて、なかなかキスケの頭に入つていかない。

ふう、と山ノ神が一つ息を吐いた。

「お主も村の暮らしが楽ではないことは身に染みておるう。大人たちは毎日毎日、辛い顔で仕事に出て疲れた顔で戻つてくる。それを遊びながら見送り、飯を食べながら出迎えるのは子供だから何もできない、それは辛いことじや。そんな矢先に起きたのが、わしがおぬしを神隠ししてしまつた四年前のあれじや」自分が関わつたことを聞いて、今まで遠くに聞こえていた山ノ神の声がやつとキスケの頭に入つていく。

それからどうなるのか、キスケは自分でも少しほは考へられよう。

なってきた。

「まったく……。子供と言つものは本能だけで動いているようで、しつかり見て、考えて動いておる。大したものじや。その考えが集まれば、こゝして神すら困らせるのだからのつ」

山ノ神が笑う。

苦笑とか、自嘲ではなく、微笑みに近い笑いだつた。

「かれらはしつかりと見ておつた。お主がいなくなつてゐる間、お主の分の年貢が払われていなかつたことを。まあ、お主は死んだことになつていから。年貢には大人も子供もなく、人数そのもので決まる。お主は知らんじやろうが、当初はお主の母親が聞引いたなんて噂もあつたのじや。……そんな怖い顔するでない。所詮噂じや、風に乗つて消えたわ」

子供達はは自らで神隠しを起こなつたのじや。少しでも大人の負担を軽くするために。

……ああ、それといのいとは村長だけは知つてゐる。もし万が一が起こつた時のためにして、話して許可をとつたのじや。
まったく……。ほんとうに大した子供達じや。

山奥の、そのまた奥の小さな二軒家。

子供達だけで暮らすにはあまりに辛すぎる環境、それでも子供達は暮らしていた。

それぞれの役割を決め、時に泣いて、時に怒り、なんとか生活していた。

キスケは少しの距離を置いてそれを見ていた。

子供達の姿を見て、キスケは自分にできることを考えていた。

それは点と点を結ぶようで、すぐにほつきりとした輪郭を描いた。

.

その大きな岩は、半年前とはすっかり変っていた。

苔や汚れはきれいに落とされ、真っ白い注連縄が巻かれていた。そして、その前には小さな社が立つてあり、酒や野菜や果物のお供えがしてあった。

辺りの草はきれいに刈られ、そこはちよつとした神社のようだつた。

とても山奥のよつには見えなかつた。

まだまだ太陽は高く、木漏れ日揺れる昼下がり。岩の上でお供えの酒をちびちびとやりながら、いい気分の罰当たりが一人。それが罰を与える側の神様だというから困り者。

山ノ神はいい氣分だつた。

「いやはや、子供が大したものとは言つたが、なるほど。あれも確かにまだ子供じゅつたわい。こんな考えを思いつくなよ」

キスケは事情全てを村の人々に話した。

村の人々達は皆怒つたが、やはり少しでも軽くなつた年貢に安堵の心があつたのも事実だつた。

そこで、これからは山ノ神に定期的な神隠しを頼むよつにしてはどうかと提案した。

その代わり、また以前のようにあの岩をきれいにして、お供え物をすること。そうすればきっと大丈夫だとキスケは言つた。

最初はほとんどの村人がそれを信じなかつたが、やがて子供達を中心信じる人が増えていった。

それに比例するように岩はきれいになり、お供え物は増えていく。

村から岩までの道も立派になつた。

「む？ 今日も来おつたか」

山ノ神は地面下りて、酒を置く。

今日も子供が神隠しをされにやつて来たのだつた。

以後信仰を取り戻した山ノ神によつて山は実りを取り戻した。村人もやがて神隠しに遭わなくとも、なんとか暮らしていくようになつた。

それでも彼らは、お供え物と岩の掃除は続けていた。

山の奥の奥にある、大きな大きな岩。時折そこで子供達が遊んでいるような声が聞こえる。

(後書き)

感想、ご指摘等ありましたら何うかお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0678d/>

優しい神隠し

2011年2月24日02時26分発行